

## 兵庫県西部でクロカタビロオサムシ大発生

三木 進<sup>1)</sup>

### 1. はじめに

2013年5月、兵庫県佐用町内でクロカタビロオサムシ (*Calosoma maximowiczii*) 1♂を採集し、「きべりはむし第36巻第2号」(2014)に短報を投稿。マイマイガ等蛾類が多く発生しているため、「2014年も、クロカタビロオサムシに出会えるかもしれない」と締めくくった。果たして2014年5月10日、スプリング8でタンパク質を研究している清水哲哉氏から「きべりはむしに短報を出していたクロカタビロオサムシを、交尾中のペアを含め、多数容易に捕まえることができた。佐用町昆虫館に展示する」とのメールをいただいた。5月16日、現地を調査したところ、2時間ほどの間に50頭ほどの本種を観察した。本種については、「関西でクロカタビロオサムシ大発生(1)」一神吉正雄, 石川延寛, 昆虫と自然 49(10), 2014一が詳しいが、兵庫県内は六甲山系に限っている。県西部初の大発生と推察されるので報告する。

### 2. 現地は10km離れた山麓

2013年に確認したのは、佐用郡佐用町佐用の佐用坂近くの山道だった。2014年には国道179号線徳久バイパスの工事が行われ、徳久トンネルの掘削工事が本格化し、近づくことすら出来なかった。そんな折、清水氏から情報をいただいた。

大発生したのは、佐用坂から直線距離にして10km

ほど離れた隣町・上郡町内。低山の北西山ろくで、田の畔道などが沿い、側に二車線の道路が走っていた。午前9時半ごろ到着し、辺りを調べた。植物によっては蛾類の幼虫に食害され、ほとんど葉が残っていないものもあった。しかし、朝は気温が低く、クロカタビロオサムシは確認できなかった(写真1)。

気温が上がり始めると、地面を這っている個体に気づいた(写真2)。さらに山際に巡らされたトタンと鉄線ワクを使った「猪鹿垣(ししがき)」の上を這いだした。中には、蛾類の幼虫を食べる個体も確認できた(写真3)。

道路に面した部分では、道路上で、枝から落ちてきた蛾類の幼虫を食べる本種が多くいた(写真4)。わずかだが、車に轢かれた個体もあった(写真5)。深さ40cmある側溝内には、上部の枝から落ちてきた蛾類の幼虫や糞が散らばり、トラップ効果もあって多くの個体が見られた。中には交尾行動をとるものも(写真6)。

### 3. オサムシが飛んだ

気温が十分上がった午前11時半ごろ、樹木の上部から黒い虫が道路上に飛び出した。当初は、「この季節にクワガタ？」と不審に思ったが、高さ3~6mの所を、頭を上にして、やや斜めになって、不器用に飛行した。道路上を10mほど直進した後、戻ってきて地面にポトッと落ちた。大きな雌だった。本種が飛ぶのを初めて見た。



写真1 生息環境。



写真2 畦道を歩く成虫。

<sup>1)</sup> Susumu MIKI 兵庫県明石市



写真3 ガの幼虫を摂食中.



写真4 道路上で幼虫を食べる.



写真5 車に轢かれた個体.



写真6 交尾行動をとる雌雄.

#### 4. 限られた生息範囲

クロカタビロオサムシが確認できたのは、山麓に沿って長さ 300 メートルほどの区間。近隣の数カ所を回ったが、他には確認できなかった。

林縁でガ類の幼虫が多く、落下したものが捕食しやすいなどの理由に加え、いったん「猪鹿垣」の外に出ると、山側に戻ろうにも、トタンの形状や材質が滑りやすく、乗り越えられない。途中まで登っても、落下してしまう（写真7）。さらに、トラップとしての側溝の存在などがあって、個体密度が増したのではないかと考えている。

実際、「猪鹿垣」の内側、山側では、目視出来た個体は少なく、樹上にいる個体も見つけられなかった。

#### 5. 多い破損個体

個体密度が高いゆえか、脚や触覚が欠けたものから、上翅の3分の1がないもの、果ては脚がほとんどないものまでいた。

欠損のないものを選んで採集すると、6♂17♀の割合であった。個体に大小があり、体長は雄が21.5～

26.5mm、雌が22.5～28.0mmだった。雌の割合が高いのと、破損個体が多いことから、発生の晩期であると考えられる。清水氏が発見した5月10日ごろがピークだったのだろう。「発生期間が2～3週間」とされるのが頷ける。6月初めと9月下旬にも再訪したが確認できなかった。

#### 6. 終わりに

今回、「猪鹿垣」のトタン部分には、一枚に十数個のテングチョウの蛹が付き、テングチョウ大発生の予兆を感じさせた。1つ持ち帰ると、無事羽化した。テングチョウの幼虫の捕食圧は小さかったのだろうか（写真8）。

一方、路面にオオムラサキの蛹が落ちていた。何らかの要因で葉ごと切り落とされたのだろう。生きていたので持ち帰ると、羽化直前に翅の部分が美しく透き通るまでになったが、そこまでだった。

クロカタビロオサムシやテングチョウの大発生時には、構成種の間で、さまざまな影響が出ることを示唆しているようで興味深かった。

本種は近年、六甲山系から三木市、たつの市などで



写真7 トタンの猪鹿垣に登る個体.



写真8 猪鹿垣についていたテングチョウの蛹.

も見つかっている. やや古い報文だが「近畿地方におけるオサムシの地理的分布(予報)」(大阪市立自然科学博物館業績第159号, 日浦勇他ほか, 1971)には, 1971年7月7日に鉢伏高原で1♀の記録が紹介されている. 兵庫県北部, さらに丹波地方での大発生はなかったのか, 気にかかる. ご存知の方は教えていただきたい. 最後に, 貴重な情報を寄せて下さった清水哲哉氏に, 紙面を借りて感謝を申し上げる.

#### 参考文献

- 神吉正雄、石川延寛 2014. 関西でクロカタビロオサムシ大発生 (1)、昆虫と自然 49(10)
- 日浦勇他ほか、1971. 近畿地方におけるオサムシの地理的分布 (予報). 大阪市立自然科学博物館業績第159号